

協和木工所

石巻の老舗建具製造所 親子三代で職人

宮城県石巻市に、来年2025年に創業90年を迎える歴史ある建具店「協和木工所」があります。上杉敏之さんは三代目社長として、先代から技術を引き継ぎ、地域の住宅や公共施設のドアや襖（ふすま）などを純国産材木から制作する建具職人です。最近では、国内だけでなく海外でもブームになっている日本の伝統技術を生かして細木による幾何学模様を描き出す「組子細工（くみこざいく）」も手がけます。

先代、先々代から会社を継いで、順調な経営を続けてきた協和木工所は、2011年3月、東日本大震災による地震と津波の直撃を受けました。店自体も被害を受け、また地域の住民や顧客も石巻を離れるなど、大きな被害が出ました。その震災から13年間、復興に取り組んできた上杉社長は、「良い建具を届けたい」と、その職人技を生かして、美しく使いやすい建具を作り続けています。

船の建造技術から発展した 石巻の建具技術

石巻の建具職人のルーツは古く、今から約400年前の1500年代、安土桃山時代から江戸時代初期に遡ります。1611年の慶長時代、三陸地方で三度の大地震と大津波が起きました。戦国大名で「独眼竜」とも呼ばれる仙台藩主伊達政宗は、この大災害後に、海外のノビスバニア（メキシコ）と貿易をしようとイスパニア（スペイン）国王やローマ教皇のもとへ使節団を派遣します。これが「慶長遣欧使節団」（1613年—1620年）で、その使節（今でいう特命全権大使のような役割）を担ったのが、家臣の支倉常長はせくら・つねながです。

船で海外を訪ねて貿易交渉を図るの

は、何年もかかる「大航海」でした。海上移動に使われる重要で堅牢な船をどうやって造るか。欧州に向かうだけでなく、無事に日本に帰ってこなければなりません。そのため、気仙沼の「気仙大工」、岩手の大船渡などの漁業地域から漁船の建造をしていた船大工が集められました。そうして完成したのが、洋式の帆船、いわゆる黒船の「サン・ファン・パウティスタ」号です。この船の建造は仙台藩の一大事業で、津波後の被災地の復興にも貢献したといわれています。作業に当たった船大工たちの弟子や子孫たちが、その後、木造家屋の大工や建具職人となり、石巻の建具職人の「ルーツ」となったと語り伝えられています。

その後の使節団ですが、支倉常長はスペイン国王フェリペ三世に謁見、教皇パウロ五世に拝謁を果たしましたが、江戸幕府のキリスト教弾圧により、結局貿易を実現することができず、7年後に仙台に戻りました。

協和木工所の歴史

協和木工所の創立は、大正から昭和を生きた初代社長、上杉社長の祖父・上杉正男さんの時代にさかのぼります。現在は、住宅の窓はアルミサッシ、そして樹脂サッシがほとんどになっていますが、今から90年前の大正、そして昭和初期には、ほとんどの家の窓や玄関は木でできていました。建物の中でなくてはならない建具——それらを作るのが、技を持った建具屋、建具職人の仕事でした。

正男さんは、石巻に生まれ、育ち、地元の建具屋・菊森建具店で働き始めました。いわゆる、弟子入りです。そこでは、親方の一番弟子からマン・ツー・マンで、「見て覚えろ」「やって覚えろ」というように厳しく技を教え込まれました。そして1935（昭和10）年、正男さんは協和木工所を創業します。親方や先輩職人に認

められての独立です。
「祖父は組子が得意でした。祖父が作った組子の見本のようなものが、今も店に残っています」と、敏之さん。

2011年の東日本大震災で、協和木工所も津波の被害に遭いました。そして店には、一冊の古いアルバムが被災を免れて残されました。その中には、若々しい法被（はつぴ）姿の正男さんが、菊森建具店に務めていた当時の写真が収蔵されています。昭和初期、正男さんと職人たちが、襖や障子の「組子」作品とともに写っているものもあります。白黒写真ながら、組子の美しいデザインと曲線がくっきりと残されています。津波の被害を受けながらも、しっかりとその写真が残されたということは、「優れた建具職人の知恵と技を画像とともに後世に伝えていく」という先代たちの思いが、まるで写真に宿っているかのような出来事でした。

正男さんは、石巻の里山の上にある自宅の隣に工房を造り、建具や組子づくりを続けました。馬を使って材木を山の上の工房に運び、建具が完成すると、馬を使って出来上がった製品を住宅や建物へと運び納品しました。

その後、現在の海に近いところへ、自宅と工房を移しました。敏之さんは「なぜ海に近いところに移ってきたかはわかりませんが、仕事が増えて山から運び出すのが大変だったのではないのでしょうか。顧客のもとへ、馬車を使って泊まりがけで建具を納入した」という話も聞きました。



初代正男さんが師匠のもとで修行をしていた頃（右から4人目が正男さん）

戦後は住宅や施設等の建設・修理の需要があり、建具職人はひっぱりだこでした。協和木工所は最盛期には弟子を10人も抱えていました。年に何回も全国各地を旅行し、大きな仕事を終えると自宅のテーブルに毛蟹が並んでいたこともあったそうです。弟子や従業員の家族や子どもたちが集まって盛大な新年会なども開かれました。

二代目昌弘さんの時代へ

そして会社は二代目昌弘さんの時代に入ります。昌弘さんは鉄道が好きで、本当は列車の運転手になりたいと思っており、本音では家を継ぐことに抵抗があったそうです。ところが長男でもあり、家を継ぐのが当然という流れの中、正男さんの弟子から技術を学んで建具職人となり、二代目に就任しました。昌弘さんは温厚な性格で、敏之さんを仕事のことで怒ったことは一度もなかったそうです。

この頃になると、住宅の窓や玄関にアルミサッシが登場、次第に普及してきました。一方で、伝統的な建具を使用する住宅は減り、顧客は寺院や公共施設などを中心に becoming ってきました。

建具店は、建物建築事業で元請業者となる住宅会社や工務店、大工から仕事を依頼されて引き受ける立場で、「技術よりも値段とばかりに、価格が安い建具店へ

と発注が流れたり、値段を叩かれたりして、技術を発揮する機会が減る傾向が顕著になっていました。

敏之さんは男3人兄弟の次男で、昌弘さんは敏之さんに「会社は継がなくてもいい」と常々話していました。そこで敏之さんは高校を卒業すると栃木県のプラスチック成形の会社に就職、社会人となり独立しました。

就職して1年が経ったころ、石巻の自宅で、大きな出来事が起きました。祖母マサ子さんががんになり闘病生活を送ることになったのです。忙しい両親の代わりに敏之さんの面倒を見てくれた最愛のマサ子さん。敏之さんの母、米子さんとともに家族だけでなく、工場に住み込む弟子たちの食事や身の回りのこと、家事や孫の世話、仕事で受注した障子張りという「女たちの仕事を含め、いくつもの仕事をこなす、家庭内の「もう一つの大黒柱」のような存在でした。

「私はすごい、はあちゃん子で。祖母が病院のベッドで『敏之、敏之』と私の名前ばかり呼んでいると聞いて、『石巻に帰って、ばあちゃんの看病をしよう』と決めました。敏之さんは勤めていた会社を辞めて石巻に帰り、マサ子さんの看病を続け、そして見送りました。

勤めていた栃木県の会社では、入社同期ではあるものの大卒のため4歳年上で、敏之さんをとっても可愛がってくれた



建具を造る社長の上杉敏之さん

先輩がいきました。その人も実家が自営業で、敏之さんの退職後、実家に戻って、やはり自動車会社トヨタの関連事業をしている親の会社を継いでいました。故郷石巻に帰った敏之さんを何かと気にかけて連絡をくれていましたが、「おばあちゃんの看病をして見送って、お前はやることをやっただけ、じゃあこれからどうするんだ。お前にいろいろ教えたこともあるから、岐阜で仕事をしないか」と、誘ってくれました。そこで敏之さんは岐阜へ。ところが、岐阜は全く知らない土地で、知っている人と言えば、誘ってくれた先輩一人。そんな敏之さんを見て、先輩はたくさんさんの友人を次々に紹介し、休みの日でも寂しくならないよう、集まって食事をしたり、出かけたりと一緒に過ごしてくれました。

岐阜で成人式に出席したその後、石巻に帰省する時、先輩からあることを言われました。「男3人兄弟がいるけど、誰も家業を継がないなんて、そんなバカな話はない。いい機会だから、帰ったら兄貴や弟と家のことをちゃんと話してこい。ただ、お前は絶対に岐阜に戻ってこいよ」。

実家で兄弟が顔を合わせるのと、すでに兄は郵便局に勤務しており途中では辞められず、弟も地元の大きな企業に就職が決まったばかりというタイミング。話し合う余地もなく、私が家を継ぐことになりました。敏之さんは当時を振り返ります。岐阜の先輩からは「ばかやろう」と怒られたそうです。

石巻に戻ってきて家業を継ぐことを最も喜んでくれたのは祖父の正男さんでした。正男さんはすでに80歳になり、実質的には仕事を引退していましたが、それでも毎日、土日祝日も関係なく、工場に顔を出し、作業の邪魔にならないよう床に散らばっている残材をきれいに片付けたり、その残材を薪ストーブやだるまストーブの燃料にくべたり、建具に使う具材を乾燥させる作業を手伝ったりしていた

ました。その職人気質には「引退」という2文字はなかったようです。

「昔の職人は機械を使わずに作ってきたから腹が出ていない。木の厚みを決めるのも、鉋(かん)なげの微妙で正確な手加減できっちりやってきたからだ。俺も若い頃は、腹なんか出ていなかった。そう苦労した日々を語っていたといいます。亡くなるその日まで、工房にいて、職人たちの仕事を眺めていた正男さん。職人として最後まで生きるといふ姿を体現した人生でした。

1970年代以降、住宅建設ブームは去り、その後のバブル経済も終わりつつある時期の敏之さんの帰省と後継。父、昌弘さんも二代目としての苦労から複雑な思いはありつつも、やはり我が子が後を継いで同じ道を歩むことをとても喜んでくれました。

祖父の一番弟子から技術を学ぶ

協和木工所に入り、敏之さんの修行が始まります。

自宅の隣に工場があったので、幼い頃から出入りしたり、中で遊んだりしていました。大きな機械がたくさんあるので、遊んでいるうちに頭や体をぶつけて、ちよっとしたけがをしたり。

母、米子さんが、幼い敏之さんをおぶって工場の手伝いをしていた時期もありました。作業工程では、母親や妻ら女性たちも、障子や襖(ふすま)をキチッときれいに貼るといふ、最後の仕上げに向けて重要な役割を担います。出来上がった建具は、家族全員で仕上げた「作品」でもあるのです。そうした家族全員の暮らしと仕事があり、長年親しんできた工場に、敏之さんは戻ってきたのです。

「私は、祖父の一番弟子から仕事を教わりました。そのお弟子さんによると、祖父はかなり気性が荒くて、金つちが飛んでくるぐらいだったそうです。ただ、私が石



弟子や従業員がそろっての新年会＝昭和40年代ごろ

巻に戻った頃には、穏やかなおじいちゃん、でそういう怖さは全くなかったですね。ただ、仕事の話になると真剣無表情に変わって、「仕事に嘘はつくなよ」と言い、仕事に対して誠実に向き合うことを教えてくれました。祖父の技術と理念を引き継いだ一番弟子、敏之さんの師匠も、技に上つたのは祖父同様、正確で厳格な教え方だったそうです。

当時は、親方や師匠が弟子に直接、「見せて、やって、やらせて」教えるやり方。そこに職人気質(かたぎ)が加わります。マニュアルなどありません。

「一番弟子の方に教わっていた当時の私は、何もわからないくせに、技を突き詰めたいい気持ちばかりがありました。『何でもやるんだ』という返事が返ってきて、会話は終了。多分それは、非常に理にかなっている、と今なら理解できますが、当時の私はそうではありませんでした。どうすればいいの、具体的な言葉を欲していましたね。自分が指導する側に回った今、技巧を学ぶ人には、具体的に言葉で説明するようにしています。時代が移り、技術の伝承方法も変わってきているのです。



組子細工と国産材へのこだわり

敏之さんは「うちはあくまでも国産材で、特に良質の秋田杉を使っています」と、良質の国産材を使った製品づくりにこだわっています。

昌弘さんが社長の時代には、学校や公共施設の建設関係の公共事業の仕事を中心に、注文建築に近い住宅の建具などの仕事も受けていました。その頃は時代の流れで、新建材やベニヤ張りの建具の仕事も多く受けていました。

「でも、新建材やベニヤの仕事をやっているのも、なんだかつまらなくて。全部国産材で作ったような建具づくりをやりたいと常々思っていました。すると、そういう会社とお付き合いが生まれて、震災前には、国産材による玄関扉を作りました。また近くのお寺からは、組子細工の襖(ふすま)の注文を受け、父が中心になって工夫しながら制作しました。山梨の寺まで視察に行つて鎌倉・室町時代の流行の紋様を再現しました。東日本大震災でもその襖が残ったのはうれしかったですよと敏之さん。

細やかな木組と微妙な凹凸。遠くから見ると、近づいて見るのではそれぞれに違った風合いや光の入り方、景色への溶け込みがあり、見ているだけでも全く飽きません。その襖がある寺は、津波の後、さまざまなもの押し寄せてきた場所

所がありました。しかし震災の後もその襖は壊れずに無事に残り、「奇跡の襖だ」と言っている人もいます。

「震災でも家が戻る」現象

東日本大震災の後、敏之さんが壊れた建物の修理に奔走するなかで、驚いたことがあります。それは「家が自ら戻る」という現象です。

「日本建築の伝統的な家はあれほどの大地震で揺れても元に戻っている。梁(はり)を繋ぎ合わせる「仕口(しぐち)」などの工法があり、それは揺れても自然に元に戻るようになっていっているんですね。材木をプレカットして金物で押さえていた現在の住宅は、傾いてしまつたら元には戻りません。長年、自然災害の多い日本で、工夫が積み重ねられて伝えられてきた日本建築の伝統と知恵、その良さは、建具職人の技術にも生かされています。自然の中で生きる建物と技術そして住んでいる方々に伝統美のなかで過ごす生活を大切にしたい建具を提供していきたいと思っています」と敏之さんは語ります。

東日本大震災、津波の被害に

社長に就任して約6年が過ぎ、順調に軌道に乗っていた2011年3月11日、

宮城県を震源とする東日本大震災が発生しました。石巻を含む東北の太平洋沿岸は、広く津波の被害に見舞われました。

協和木工所は、海から直線距離で約3キロにあり、海との間に日本製紙石巻工場という大きな工場があったおかげで、津波の直撃は免れましたが、建物の中では、地震で家具や物が落下し、ゆっくりとした海水の流れが地上1.5メートルの高さまで押し寄せ、建物1階が完全に水没。1階にあった機械も水と泥に浸かって使えなくなっていました。隣接する住まいにいた父・昌弘さん、母・米子さんとは3日間連絡がつかずにずっと心配していました。敏之さんは震災直後は仙台で仕事をしていて、妻をはじめ家族もみな無事でした。完成していた建具も奇跡的に被害を免れました。

「東日本大震災は被害が広範囲だったため、修理をしてくれる機械屋さんも被害を受けて来られる状態ではなかった。なんとか修理が終わって機械が全部揃ったのが、その年の10月ぐらい。半年以上かかりました」と敏之さん。

震災の影響は、思わぬところにも現れてきました。長年お世話になった機械の会社が、震災を契機に廃業することに。困り果てているところ、これまで取引のあった家具製造で有名な福島県二本松市の大工さんとたまたま話すことがありました。機械が壊れて大変だと言つと、すぐ二本松から機械メンテナンスの会社を紹介してくれ、技術者を石巻に連れてきてくれました。ほかにも、長年取引のある福島県郡山市の会社の社長が、週に2回、トラックに物資を積んで持つて支援にきてくれたこともありました。

震災から1、2ヶ月は、1階の工場に溜まった泥かきと機械の修理。その後にはぼつり、ぼつりと、自宅の玄関戸や襖を直してほしいなどの修理の依頼が入る様になりました。石巻市内はまだ津波の

傷跡が残る場所ばかりで、道路の路面はでこぼこ、まだ放置されたままの車両で渋滞になっているところもあり、敏之さんは修理作業のため、鉋(かんな)と鋸(のこぎり)を自転車の前かごに積んで石巻を走り回りました。震災直後は、地震と津波の水で家具が倒れ、それによって柱や戸が歪んだり痛んだり、家々ではさまざまな問題が起きていました。最初は家具の修理、その後に建具の修理や調整と、時間の経過を経て作業内容も変わっていききました。

それから数年間は、津波で家が壊れたり、流されたりした家庭が家を新築するなど、建築ブームが押し寄せました。しかし、現在はそのブームも終わり、石巻市内では逆に避難で移転し、高齢で亡くなる人が増えるなどして、世帯数が減少。現在は少しずつ、顧客や取引先事業所が戻ってきてはいるものの、着工数は減少の一途で、厳しい時代に入っています。

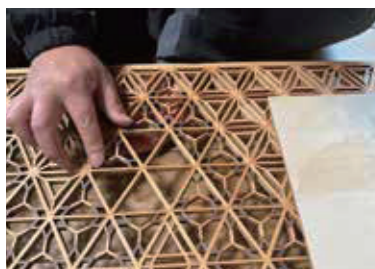
「これまで、取引先や友人、知人、とにかく人に恵まれて、声をかけてもらつてここまでやってこられた。仕事の受注は長年工務店や大工さん任せでやってこられたものの、震災の影響で住宅の建設サイクルがずれて、今までのようにはやっていけない時代になりました。私も含め、職人はものづくりはプロでも、発信力は不十分です。これからは、建具職人の技、組子細工の素晴らしさなどを発信して、伝統技術を広く知ってもらい、顧客を獲得していきたい」と敏之さんは新たな目標を見据えています。



天然木のテーブルや家具も製造

組子細工の技法

組子細工の特徴は、釘を一切使わず、数ミリという微細な木の板に、ほぞ(木の板同士を組み合わせるための溝)や、切り込みを入れて組み合わせ、美しく繊細な幾何学模様を作り出す技法です。



- ①はじめに菱形の格子を作ります。
- ②その後、模様を作り出す細くて薄い小さな木の板を作ります。木材を細く小さく切り、引き割り、一つ一つに木々を組み合わせるためのほぞ(凹凸の溝)や穴を作ります。模様によって、ほぞや切り込みの角度などが決まっているため、この作業が最も大事で、繊細さと慎重さが必要です。その小さな木片のパーツは何種類にものぼり、全体で数百枚以上になることもあります。
- ③パーツが出来上がったら菱形の格子へ組み込みます。職人は、鉋(かんな)や鋸(のこぎり)、ノミなどの道具で調節しながら、自分の手で一つ一つの木片のパーツを組み上げていきます。

組子の制作作業は、時間がかかり、根気や集中力、繊細さが必要な職人技です。実際に組み上がった組子細工の襖や扉が設置され、外から差し込む光が組子の模様を建物の中で描き出すと、光と空気と木々の空間を美しく演出してくれます。

協和木工所で製造された作品



有限会社 協和木工所

石巻随一の老舗の木製建具・木製家具の製造販売所

住所：〒986-0855 宮城県石巻市大街道東1丁目2-67

電話：0225-22-5074

電子メール：info@kyowawood.shop

HP：https://www.kyowawood.shop/

採用と教育研究所

saiyou to kyouiku laboratory

志ある中小企業経営者の応援団として「採用から共育」まで一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員の採用・人財育成・職場定着等に携わり、CSR（社会貢献活動）を活用した「いい会社創り」のサポーターとして定評がある。



YELL

Vol. 27

2024年3月11日

発行：採用と教育研究所

〒960-8055

福島県福島市野田町6-7-8

電話 024-529-5153

info@saiyoutokyouiku.com

